読書案内

序章

Fleagle JC（1999）Primate Adaptation and Evolution. 2nd Edition. Academic Press.

Goodman M, Grossman LI, Wildman DE（2005）Moving primate genomics beyond the chimpanzee genome. Trends in Genetics, 9: 511-517.

Goodman M, Porter CA, Czelusniak J, Page SC, Schneider H, Shoshani J, Gunnell G, Groves C（1998）Toward a phylogenetic classification of primates based on DNA evidence complemented by fossil evidence. Molecular Phylogenetics and Evolution, 9: 585-598.

長谷川政美（1992）『増補：DNA からみた人類の起原と進化』海鳴社.

京都大学霊長類研究所（編）（1992）『サル学なんでも小辞典』講談社.

京都大学霊長類研究所（編）（2003）『霊長類学のすすめ』丸善.

Sarich VM, Wilson AC（1967）Immunological time scale for hominoid evolution. Science, 158: 1200-1203.

杉山幸丸（編）（1996）『サルの百科』データハウス社 .

山極寿一（編）（2007）『ヒトはどのようにしてつくられたか』岩波書店.

第 I 部

相見　滿（2000）「霊長類の進化」（大石　正・小野高明編）『光環境と生物の進化』（シリーズ光が拓く生命科学　第 2 巻），共立出版，151-166.

アンデル THV（1991）『さまよえる大陸と海の系譜：これからの地球観（新訂版）』（卯田強訳）築地書館.

Beard C（2004）The Hunt for the Dawn Monkey: Unearthing the Origins of Monkeys, Apes, and Humans. Univ. California Press.

Curtis D J, Rasmussen M A（2006）The evolution of cathemerality in primates and other mammals: A comparative and chronoecological approach. Folia Primatol., 77: 178-193.

遠藤秀紀（2002）『哺乳類の進化』東京大学出版会.

遠藤秀紀（2006）『解剖男』講談社.

遠藤秀紀（2006）『遺体科学の挑戦』東京大学出版会.

カークウッド T（2002）『生命の持ち時間は決まっているのか』（小沢元彦訳）三交社.

國松　豊（2002）「ヒト科の出現：中新世におけるヒト上科の展開」『地学雑誌』116（6）: 798-815.

國松　豊（2005）「新生代後期アフロ・ユーラシアにおける化石類人猿」『月刊地球』27（8）: 630-635.

コルバート EH，モラレス M（1991）『脊椎動物の進化（原著第 4 版）』（田隅本生　監訳）築地書館.

中務真人（2002）「類人猿のぶらさがり型適応は多元的か？」『霊長類研究』18:175-185.

中務真人（2003）「類人猿の誕生」（西田正規・北村光二・山極寿一 編）『人間性の起源と進化』昭和堂.

スニュー B（2005）「第三千年紀：人類の初期進化について明らかになった新しい一章」（中務真人，國松豊 訳）『月刊地球』27（8）: 642-647.

スプレイグ D（2004）『サルの生涯，ヒトの生涯：人生計画の生物学』京都大学学術出版会.

マクナマラ KJ（2001）『動物の発育と進化：時間がつくる生命の形』（田隅本生訳）工作舎.

マリーナ RM，ブシャール C（1991）『事典　発育・成熟・運動』（高石昌弘，小林寛道　訳）大修館書店.

第 II 部

Boinski S, Garber PA（編著）（2000）On the Move: How and Why Animals Travel in Groups. University of Chicago Press.

Cheney DL, Seyfarth RM（1992）How monkeys see the world: Inside the mind of another species. University of Chicago Press.

ドゥ・ヴァール F（2000）『ヒトに最も近い類人猿ボノボ』（藤井留美　訳）ティービーエス・ブリタニカ.

ドゥ・ヴァール F（2002）『サルとすし職人』（西田利貞，藤井留美訳）原書房.

エンジェル S（2003）『動物たちの自然健康法：野生の知恵にまなぶ』（羽田節子 訳）紀伊国屋書店.
Fleagle JC（1999）Primate Adaptation and Evolution. 2nd Edition. Academic Press.
古市剛史（1999）『性の進化，ヒトの進化：類人猿ボノボの観察から』朝日新聞社.
伊沢 紘生（1985）『アマゾン動物記』どうぶつ社.
伊沢 紘生（1982）『ニホンザルの生態：豪雪の白山に野生を問う』どうぶつ社.
井上雅央（2002）『山の畑をサルから守る：おもしろ生態とかしこい防ぎ方』農山漁村文化協会.
Johns T（1990）. The origins of human diet & medicine. The University of Arizona Press.
加納隆至（1986）『最後の類人猿』どうぶつ社.
河合雅雄（1990）『人間以前の社会学：アフリカに霊長類を探す』教育社.
黒田末寿（1991）『ピグミーチンパンジー：未知の類人猿』筑摩書房.
三戸幸久，渡邊邦夫 （1999）『人とサルの社会史』東海大学出版会.
室山泰之（2003）『里のサルとつきあうには：野生動物の被害管理』京都大学学術出版会.
中川尚史（1994）『サルの食卓：採食生態学入門』平凡社.
西田利貞（1999）『人間性はどこから来たか』京都大学学術出版会.
西田利貞，上原重男（1999）『霊長類学を学ぶ人のために』世界思想社.
大井徹，増井憲一編著（2002）『ニホンザルの自然誌』東海大学出版会.
Rosenthal G, Janzen DH（1979）Herbivores- Their interaction with secondary plant metabolites. Academic Press.
杉山幸丸編著（2000）『霊長類生態学』京都大学学術出版会.
高畑由起夫，山極寿一編著（2000）『ニホンザルの自然社会：エコミュージアムとしての屋久島』 京都大学学術出版会.
山極寿一（2005）『ゴリラ』東京大学出版会.
山極寿一（2006）『サルと歩いた屋久島』山と渓谷社.
渡邊邦夫（2000）『ニホンザルによる農作物被害と保護管理』東海大学出版会.

第 III 部

Bradbury JW, Vehrencamp SL（1998）Principles of Animal Communication. Sinauer.
Cheney DL, Seyfarth RM（1990）How Monkey See the World? University of Chicago Press.
エクマン P，フリーセン WV（1987）『表情分析入門：表情に隠された意味をさぐる』（工藤　力　訳編）誠信書房 .
藤田和生（1998）『比較認知科学への招待：「こころ」の進化学』ナカニシヤ出版.
藤田和生（2007）『動物たちのゆたかな心』京都大学学術出版会.
クレブス JR，デイビス NB（1991）『行動生態学』（山岸哲，巌佐庸共訳）．蒼樹書房.
ゴメス FC（2005）『霊長類のこころ：適応戦略としての認知発達と進化』（長谷川眞理子訳），新曜社.
濱治代，鈴木直人，濱保久（2001）『感情心理学への招待』サイエンス社.
長谷川寿一，松沢哲郎（編）（2000）『心の進化』岩波書店.
ハリデイ TR, スレイター PJB（編）（1998）『動物コミュニケーション：行動のしくみから学習の遺伝子まで』（浅野俊夫，長谷川芳典，藤田和生訳），西村書店.
今井邦彦（2001）『語用論への招待』大修館書店.
岩立志津夫，小椋たみ子編（2005）『よくわかる言語発達』ミネルヴァ書房.
正高信男（編著）（1992）『ニホンザルの心を探る』朝日新聞社.
正高信男（2001）『子供はことばをからだで覚える』中央公論社.
正高信男（2006）『ヒトはいかにヒトになったか』岩波書店.
松沢哲郎（1991）『チンパンジーから見た世界』東京大学出版会.
松沢哲郎（2002）『進化の隣人：ヒトとチンパンジー』岩波書店.
松沢哲郎（2006）『おかあさんになったアイ』講談社.
Matsuzawa T, Tomonaga M, Tanaka M（Eds.）（2006）Cognitive Development in Chimpanzees. Springer.
明和政子（2006）『心が芽生えるとき』NTT 出版.
中村徳子（2004）『赤ちゃんがヒトになるとき』昭和堂.
小田亮（2002）『約束するサル』柏書房.

Povinelli DJ（2000）Folk Physics for Apes -The Chimpanzee's Theory of How the World Works-, Oxford University Press.
プレマック D，プレマック A（著）(2005)『心の発生と進化：チンパンジー，赤ちゃん，ヒト』（長谷川寿一監修 , 鈴木光太郎訳）新曜社.
竹下秀子（2001）『赤ちゃんの手とまなざし』岩波書店.
竹下秀子（1999）『心とことばの初期発達：霊長類の比較行動発達学』東京大学出版会.
田中昌人（1999）『1 歳児の発達診断入門』大月書店.
トマセロ M（2006）『心とことばの起源を探る』（大堀壽夫他訳）勁草書房.
友永雅己，田中正之，松沢哲郎（編著）(2003)『チンパンジーの認知と行動の発達』京都大学学術出版会.
吉川左紀子，中村真，益谷真（1993）『顔と心：顔の心理学入門』サイエンス社.
ユクスキュル J，クリサート G（1973）『生物から見た世界』（日高敏隆，野田保之訳）思索社.（2005 年岩波文庫）.

第 IV 部

濱田穣（2007）『なぜヒトの脳だけが大きくなったのか』講談社.
Kandel ER, Schwartz JH, Jessell TM（eds.）Principles of Neural Science. McGraw Hill.
狩野方伸，高田昌彦，伊佐正　編（2006）実験医学増刊『脳機能研究の新展開』羊土社.
久保田競編（1994）『発達と脳のメカニズム』ミネルバ書房.
京都大学霊長類研究所編（2003）『霊長類学のすすめ』丸善株式会社.
ルドー J（2004）『シナプスが人格をつくる』（谷垣暁美　訳）みすず書房.
マーカス G（2005）『心を生みだす遺伝子』（大隅典子　訳）岩波書店.
三上章允（1991）『脳はどこまでわかったか』講談社.
Nieuwenhuys R, Voogd J, van Huijzen Chr（1991）『図説中枢神経系』（水野昇，岩堀修明，中村泰尚　訳），医学書院.
二木宏明（1989）『脳と記憶』」共立出版.
タルヴィング E（1985）『タルヴィングの記憶理論』（太田信夫　訳），教育出版.
タンジ RE，バーソン AB（2002）『痴呆の謎を解く』（森　啓　監修，谷垣暁美　訳）文一総合出版.
スクアイア RS（1989）『記憶と脳』（河内十郎　訳），医学書院.

第 V 部

Antognini JE, Carstens E, Raines D（eds）(2003) Neural Mechanisms of Anesthesia. Humana Press.
鎮目和夫編（1992 年）『成長ホルモンとその関連ペプチド』朝倉書店.
榎本知郎（1990）『愛の進化』どうぶつ社.
榎本知郎（1994）『人間の性はどこから来たのか』（自然叢書 22）平凡社.
Graham C（ed.）(1981) Reproductive Biology of the Great Apes. Academic Press.
グランディン T，ジョンソン C（2005）『動物感覚』（中尾ゆかり訳），日本放送出版協会.
花岡一雄（編集）(1999)『 麻酔生理学：麻酔に携わるすべての医師のために』真興交易医書出版.
猪　貴義他編（1987）『動物の成長と発育』朝倉書店.
吉川　寛（1984）『遺伝子操作』大月書店.
清野　宏，石川博通，名倉　宏（2001）『粘膜免疫』中山書店.
小林　剛（2004）『WHO 環境ホルモンアセスメント：内分泌撹乱化学物質の科学的現状と国際的評価』エヌ・ティー・エス社.
森　千里（2002）『胎児の複合汚染：子宮内環境をどう守るか』中央公論社.
Nielsen L（1999）Chemical Immobilization of Wild and Exotic Animals. Iowa State Press.
日本比較内分泌学会編（2000）『からだの中からストレスをみる』学会出版センター.
日本比較内分泌学会編（1996）『成長ホルモン・プロラクチンファミリー』（ホルモンの分子生物学（2）），学会出版センター.
プラム D（2001）『なぜサルを殺すのか』（寺西のぶ子訳）白揚社.
プリングル L（1995）『動物に権利はあるか』（田邊治子訳）日本放送出版協会.
多田富雄（1993）『免疫の意味論』青土社.
高畑由起夫（1994）『性の人類学』世界思想社.

谷口　克 編（1994）『免疫の最前線』（別冊日経サイエンス 110）日経サイエンス社.
高橋迪雄監修（2001）『哺乳類の生殖生物学』学窓社.
Thurmon JC, Tranquilli WJ, Benson GJ（1996）Lumb & Jones' Veterinary Anesthesia. Third Edition. Blackwell.
齋藤英彦，吉田　純 編（2000）『遺伝子医療』名古屋大学出版会.
佐々木伸雄，多川政弘，西村亮平（2006）『獣医臨床麻酔学』学窓社.
佐藤衆介（2005）『アニマルウェルフェア』東京大学出版会.
山極寿一（1994）『家族の起源』東京大学出版会.
Webster J（2005）Animal Welfare. Blackwell Publishing.

第 VI 部

川本　芳（2003）「遺伝子の多様性から考える進化：霊長類の集団遺伝学」『霊長類学のすすめ』（京都大学霊長類研究所編），丸善，pp.152-170.
川本　芳（2005）「遺伝子からみた多様性と人間の特徴」『生物多様性はなぜ大切か？』（日高敏隆 編），昭和堂，pp.73-96.
川本　芳（2005）「ケモノたちはどのように定着したか」『日本の動物はいつどこからきたのか：動物地理学の挑戦』（京都大学総合博物館編），岩波書店，pp.40-46.
川井啓市編（1994）『胃：形態とその機能』医学書院.
木原　均（1974）『生物講義』講談社サイエンティフィック.
村山美穂（2003）『遺伝子は語る』河出書房新社.
野澤　謙（1994）『動物集団の遺伝学』名古屋大学出版会.
斉藤成也（2004）『ゲノムと進化』新曜社.
Sumner AT（2003）Chromosomes. Blackwell.
竹中修（企画）村山美穂・渡邊邦夫・竹中晃子（編）（2006）『遺伝子の窓から見た動物たち：フィールドと実験室をつないで』京都大学学術出版会.
ターナー B（2005）『クロマチン』（堀越正美訳），シュプリンガー・フェアラーク東京.
津田基之編（1997）『感覚情報：生物の巧みなシグナルのやり取り』（生物物理から見た生命像 4）吉岡書店.
山内昭雄，鮎川武二（2001）『感覚の地図帳』講談社.